HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	JFL環境における日本語学習者を対象とした内発的動機づけ研究の可能性 ： 香港における日本のポピュラーカルチャーをきっかけとする学習者の検討から
Author(s)	小林, 由子
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 27, 157-172
Issue Date	2018-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71729
Type	departmental bulletin paper
File Information	157-172_kobayashi.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Jimcts

JFL環境における日本語学習者を対象とした内発的動機づけ研究の可能性
―香港における日本のポピュラーカルチャーをきっかけとする学習者の検討から―

北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部　教授
小林　由子

Potential of Intrinsic Motivation Study for Japanese Learning in JFL Environment — On Learners Triggered by Japanese Popular Culture in Hong Kong —

KOBAYASHI Yoshiko

abstract

Intrinsic Motivation is important for Japanese learners in JFL (Japanese as Foreign Language) environment because they often triggered by their interest in Japanese language or culture. Especially more learners are triggered by Japanese popular culture recently. But there are few studies using an intrinsic motivation model of educational psychology. In many Japanese language education studies, motivation theory in SLA (Second Language Acquisition) studies are applied. Motivation models in SLA study partly intake psychological theory but the psychological theory in SLA study does not renew. In these years new theories of intrinsic motivation are proposed and they are beneficial to discuss motivation of Japanese learners. This paper aims to show potential of intrinsic motivation in study of Japanese learning on data of learners triggered by Japanese popular culture in Hong Kong.

1 はじめに

国際交流基金（2017）によると、2015年の海外の日本語教育機関における日本語学習者数はおよそ365万人である。また、国際交流基金（2013）では、「日本語学習の理由」として「マンガ・アニメ・J-POP等が好きだから」を半数以上の対象者が挙げている。

日本語教育分野での先行研究では、日本のポピュラーカルチャーは日本語学習動機づけのきっかけにはなっているが、日本語学習を始めてからの学習動機づけとは、2章で述べるようにあまり関わっていないとされている。しかし、これらの研究においては理論的検討がほとんど行われていないため、日本語学習動機づけと日本のポピュラーカルチャーの関連を理論的観点から検討することは有意義であると考えられる。

また、教室外で日本語が使われないJFL（Japanese as Foreign Language：外国語としての日本語教育）環境での日本語学習動機づけについては、第二言語習得研究における「統合的・道具的動機づけ」によるものや、理論的検討よりもインタビューの質的調査などの記述的研究が多く、教育心理学的な理論からの考察はそれほど見られない。

JFL環境における日本語学習においては、学校での必修科目としてよりも日本語・日本への関心により自ら日本語を選択し学ぶ学習者が多いことから、学習・学習内容そのものが動機となっている内発的動機づけの観点からの検討が有効であると考えられる（小林2016）。さらに、近年、教育心理学分野における内発的動機づけ研究においては、6章で述べるように、新たな知見やモデルが示されている。

そこで、本稿では、香港での調査に基づき、JFL環境における日本語教育における内発的動機づけ研究の可能性について検討する。

2 日本語学習と日本のポピュラーカルチャーの関わりについての先行研究

臼井（2014）は、マンガ・アニメーションの専門家である元日本語学習者のライフストーリー分析を行い、マンガ・アニメーションが日本語学習と直接的な関わりが薄いことを示している。

また、根本（2016）は、カタールの大学および日本語教育機関で学ぶ11名を対象にインタビュー調査を行い、M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）により学習の変化のプロセスを記述した。その結果、「日本語がわからない」ことは日本語学習の動機づけになるが、日本のポピュラーカルチャーが日本語学習の動機づけと言い切れるかどうかは疑問であるとし、授

小林 由子 KOBAYASHI Yoshiko

業で日本のポピュラーカルチャーを扱えばいいというものではないと結論づけた。

上記の先行研究は、いずれも、日本のポピュラーカルチャーが日本語学習の動機づけになるとは限らないことを示している。しかし、研究手法としてはインタビューの質的分析が中心であり、動機づけ理論からの検討はあまりなされていない。

3 日本語教育研究分野における動機づけ研究

JFL環境での日本語教育における動機づけ研究の嚆矢は、縫部・狩野・伊藤（1995）である。縫部らの研究の枠組みで行われた日本語学習動機づけ研究は少なくない（郭・大北2001など）。縫部らは第二言語習得研究におけるGardner & Lambert（1959）の「統合的動機づけ」「道具的動機づけ」を分析の枠組みとしているが、Gardner & Lambertの分類と日本語教育研究での分類は一致しておらず動機づけの分類については疑問が残る（詳細は小林（2016）を参照）。

また、第二言語習得研究における動機づけ理論は、第二言語習得研究の分野で独自の発展を遂げており、心理学的な知見を一部取り入れてはいるものの、その後に心理学の分野で発展した研究成果は取り入れられていない。

JFL環境での日本語学習では、学習者は自らの日本語・日本への関心から日本語を選択していることから、学習動機を学習内容への関心と関連づける内発的動機づけ理論の観点から検討することは有意義であると考えられる。心理学分野における内発的動機づけ理論は近年発展を見せており、学習に対する興味を持続させるという観点から日本語教育研究に貢献することができる。

4 内発的・外発的動機づけ研究と外国語教育研究

教育心理学の分野では、「何か他の報酬を得るための手段としてではなく、それ自体を満たすことを目的とされた欲求」を「内発的動機づけ」、「何らかの他の欲求を満たすための手段としてある行動をとることに動機づけられる」ことを「外発的動機づけ」と呼ぶ（市川2011）。

「内発的動機づけ」は、「外発的動機づけ」よりも好ましいとされることが多い。その理由としては、外発的動機づけによる学習は賞罰が与えられない状況になると学習しなくなる可能性があることと、外的な賞罰に注意が向けられて学習そのものに関心がなくなると高い関与が期待できず結果的に低い

遂行成績になってしまうことが挙げられる（市川2011）。堀野・市川（1997）では、内発的な学習動機づけである「内容関与動機」が、繰り返して暗記を行うのではなく自らの知識と関係づけを行う「深い」学習である「体制化方略」と有意に結びつき、この「体制化方略」が成績と有意に結びつくこと、外発的な動機づけである「内容分離動機」は学習方略とも成績とも結びつかないことが示された。

当初、「内発的・外発的動機づけ」は二項対立的な概念として扱われていたが、その後、連続体として捉えられるようになり、特に、全くやる気のない無動機あるいは外的な報酬のために学ぶ外発的動機づけが内発的動機づけに変わっていくという「自己決定理論」がRyan & Deci（2009など）によって提唱されるようになった。

この理論は、「関係性への欲求」「有能さの欲求」「自律性の欲求」が満たされることによって、価値の内在化と自律性（自己決定性）が高くなり、自己調整が行われ「外発的動機づけ」が「内発的動機づけ」になっていくとする（瀧沢2012）。動機づけは図1のように無動機・外発的動機づけ・内発的動機づけに分けられ、内発的動機づけに近づくほど、学習の自律性が高くなるとされる。

■図1　自己決定理論による動機づけの構造
（櫻井（2012）および伊田（2015）をもとに作成）

動機づけ	無動機	外発的動機づけ				内発的動機づけ
自己調整	なし	外的	取り入れ	同一化	統合	内発的
動機の具体例	やろうと思わない	叱られるからしかたなく	不安だから周りがするから	重要だから必要だから	やりたいから	楽しいから好きだから
自律性	低い←					→高い

「自己決定理論」は、動機づけ研究のメインストリームと位置づけられ（伊田2015）、日本における英語教育など多くの分野で実践と検討が行われている（廣森・田中2006など）。

5　香港における日本のポピュラーカルチャーをきっかけとする日本語学習者の動機づけ

5.1　香港における日本のポピュラーカルチャー

香港においては、映画については1959年に松竹が香港支社を設立した。また、1970年代よりゲームセンターで日本製ゲームが普及し、1980年代より広東語に吹き替えた日本のアニメーションがテレビ放映されるようになり（李2006）、家庭用ゲーム機が普及した。

呉（2015）は、日本の映画・流行歌・ゲーム・マンガ・アニメ（アニメーション）・ラノベ（ライトノベル）などが香港人の「集団的記憶（集體回憶）」の一部となっているとしている。また、宮副（2007）は、香港の成人・大学生の学習者の多くが日本の大衆文化の享受をきっかけとして学習を始めていると述べている。

5.2　香港における日本のポピュラーカルチャーと日本語学習者

小林（2017）は、香港における日本語学習者177名を対象に質問紙調査を行った。対象者は、日本語を選択科目として履修する大学生である。

「日本のポピュラーカルチャーに興味がある」かどうかについて6件法で評価を求めた結果、対象者の93%が「興味がある」と答えた（評定値6：38%、評定値5:35%、評定値4:20%）。また、「好きな日本のポピュラーカルチャー」について複数回答を求めたところ、「アニメ」22%、「マンガ」19%、「映画」19%、「ドラマ」17%、「ゲーム」15%、「音楽・J-POP」6%、「アイドル」2%であった。

調査の対象となった、日本語を選択して学ぶ香港の日本語学習者は、総じて日本のポピュラーカルチャーに興味があり、興味があるポピュラーカルチャーは多様であると言える。

また、小林（2018a）では、香港で日本語学を専攻している、日本語学習に熱意のある大学4年生4名にインタビュー調査を行った。日本語レベルはいずれも上級である。

対象者・調査の概要を表1に示す。

表1　対象者・調査の概要

	対象者A	対象者B	対象者C	対象者D
性別	女	男	女	女
専攻	日本研究 韓国研究	日本研究 地理学	日本語 言語学	日本研究
日本語学習開始年齢	13	19	20	14
日本大衆文化に 初めて触れた年齢	10	6（13）*	16	10
関心のある大衆文化	ゲーム	アニメ ラノベ	アニメ ドラマ	ゲーム
日本留学経験	あり （1年）	あり （1年）	なし	あり （半年）
インタビュー時間（分）	34	48 （同時に実施）		45

＊広東語吹き替えアニメを6歳から、広東語字幕付きアニメを13歳から見始めた

これらの対象者に対し、半構造化インタビューを行った。インタビューから得られた各対象者のストーリーは以下の通りである。

【対象者A】
・インタビューから得られたストーリー

10歳ごろからゲームボーイを始めた。ゲームは日本語表示のみであった。
14歳前後から字幕つきのテレビ番組を見始めた。
日本語を学び始めたのはゲームやテレビ番組の日本語を知りたかったためである。13歳から日本語を独学し始めた。わからない言葉が出てくると調べるようになった。大学に入る前の2年間はコミュニティカレッジで日本語を勉強し日本語能力試験のN1（最上級）を取った。
中学生の時、天皇に関する中国語の本を読み日本文化に興味を持った。
大学に入ったときには、文法用語など「学術的」な言葉は知らなかった。
授業では「学術的」「専門的」な言葉が学べるのがよい。日本語が留学先で役に立って嬉しかった。
将来はゲームプランナーになりたかったが、日本の製鉄会社に就職が決まった。

質問紙調査では、「日本語が得意だ」「日本や日本語に関する研究がしたい」に「あまり」と回答している。一方、「マンガ・アニメ・ゲームに関する仕事がしたい」には「とても」と回答している。

対象者Aは、ゲームがきっかけで日本や日本語に興味を持ち、大学入学前から日本語学習を始め、日本語能力試験でN1を取得しているが、日本語が得意だとは感じていない。インタビューでは「学術的・専門的な日本語」という言葉がしばしば聞かれ、独学で早い時期に日本語学習を始めたからか、日本語をきちんと習得したいという姿勢がうかがえ、日本語そのものへ関心が向いているといえる。また、日本のポピュラーカルチャーを仕事にしたいと考えている。

【対象者B】
・インタビューから得られたストーリー

広東語吹き替えのアニメを6歳ぐらいから、広東語字幕つきアニメを13～14歳から見始めた。高校2年生からライトノベルを日本語で読み始めた。
子どものころからニュースなどで日本を知り、日本に関心があった。
日本語学習は大学に入ってから始めた。大学に入った時点で、アニメやラノベの日本語は60～70%わかっており、大学では復習をしている感じだったが、どんどん難しくなった。なんとなく日本語はわかっていたが、大学で勉強を始めてから逆に分からなくなった。日本の会社に入れるレベルかどうか心配である。
将来は日本に住みたい。

対象者Bは、質問紙調査では、「日本語が得意だ」「マンガ・アニメ・ゲー

ムに関する仕事がしたい」に「あまりあてはまらない」と回答している。

日本のポピュラーカルチャーに触れる前から日本に関心があった。日本語学習を始めたのは大学からで、その時点でかなりの日本語が理解できたが、日本語が得意だとは感じていない。インタビューでは、「日本で仕事をする」「日本に住む」ことにしばしば言及しており、日本語やポピュラーカルチャーそのものではなく、日本や日本文化全体への接近が目的になっていることがうかがえる。

【対象者C】
・インタビューから得られたストーリー

> 16歳ぐらいからネットで字幕つきアニメを見始めた。マンガはネットで読むので中国語版を読む。ドラマも好きで、日本語がわかるようになってからはテレビの言語を日本語にして見ている。
> 大学に入ってから日本語学習を始めた。大学に入るまでは日本語がほとんどわからなかった。わかるようになって驚いた。アニメやドラマの日本語がわかりたくて日本語学習を始めたわけではない。
> 日本語母語話者と同じように発音できるようになりたい。スマートフォンに「名探偵コナン」のセリフを入れて聴いている。
> 将来は、香港の公務員か銀行員になりたい。

質問紙調査では、「マンガ·アニメ·ゲームに関する仕事がしたい」「マンガ·アニメ・ゲームの日本語を理解するために日本語を始めた」に「あまり当てはまらない」と回答している。今回の対象者の中で唯一ポピュラーカルチャーが日本語学習のきっかけになっていない。インタビューでは「日本人と同じような発音」という言葉がしばしば聞かれた。専攻が日本語・言語学で、言語そのものに関心があることがうかがえるが、日本語やポピュラーカルチャーと仕事を切り離して考えている。

【対象者D】
・インタビューから得られたストーリー

> 10歳ごろからPS2の日本語のゲームを始めた。ゲームの実況動画が好きでよく見る。
> 日本語を学び始めたのは、ゲームの日本語がわかりたかったためである。
> 14歳から週2回日本語学校に通うようになった。大学に入る前の3年間中文大学のコミュニティスクールで日本語を学び、大学2年生の時現在の大学に編入した。日本語でわからない言葉があると、Yahoo検索で調べる。
> 将来は、ゲームでの日本語について研究したい。

質問紙調査では「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」というネガティブな回答はみられなかった。ゲームとゲーム実況に関心があり、

ポピュラーカルチャーがきっかけで早い時期に日本語学習を始めている。将来はポピュラーカルチャーにおける日本語について研究したいと述べており、日本語とポピュラーカルチャーそのものが目的になっているといえる。

【対象者の共通点を相違点】

4名の対象者には、以下のような共通点と相違点がある。

・共通点
  ・日本のポピュラーカルチャーに強い関心を持っている
  ・日本のポピュラーカルチャーから日本の他の事項に関心が広がった
  ・将来は日本に関する仕事がしたい
  ・「日本語は難しい」と感じているが、そのことが動機減退につながっていない

・相違点
  ・日本語学習の開始時期（大学入学以前か否か）が異なる
  ・関心がある日本のポピュラーカルチャーが異なる
  ・ポピュラーカルチャー以外の日本文化への言及の有無
  ・日本語能力の自己評価が異なる
  ・日本のポピュラーカルチャーが日本語学習のきっかけになっていない者がある（対象者C）
  ・関心が、日本語そのものにある者（対象者A・C）、日本に住み働くということにある者（対象者B）、ポピュラーカルチャーにある者（対象者A･C）、日本語とポピュラーカルチャーの関わりにある者（対象者D）がある。

「日本に関する仕事がしたい」という質問紙の回答傾向は共通しているが、その内容は、ポピュラーカルチャーに関する仕事、日本での仕事、日本語・ポピュラーカルチャーの研究と、それぞれ異なる。また、インタビューでの回答が質問紙の回答とは異なり、日本語やポピュラーカルチャーとは関係のない進路を考えている者（対象者C）もある。「日本に関する仕事」の内容が、ポピュラーカルチャーに関わる職業（対象者A）、日本に住むためのもの（対象者B）、日本語・ポピュラーカルチャーの研究（対象者D）と異なる。

対象者間の比較・相違を表2（次ページ）に示す。

ストーリーを見ると、これらの学習者の学習動機づけは必ずしも自己決定理論とは一致しない。4名は、いずれも内発的動機づけが高いが、特に、対象者Bは、「日本に住む」という将来的な展望を持っており、日本語についても「日本の会社でやっていける日本語」という発言がしばしば見られた。このことは、日本語が学習の目的というよりも日本に住み働くための手段となっているように見える。すなわち、対象者Bの学習動機づけは、最終的に外発的動機づけである「同一化」または「統合的」動機づけに位置づけられ、自己決定理論の観点からは後退していることになる。しかしながら、対象者Bは日本語や日本語学習については「好き」「おもしろい」と回答しており、内発的な動機づけを持っているといえる点が自己決定理論と矛盾する。

表2　対象者の比較

	対象者A	対象者B	対象者C	対象者D
日本の大衆文化が好き	◎	◎	◎	◎
好きな日本の大衆文化	ゲーム	アニメ ラノベ	アニメ ドラマ	ゲーム ゲーム実況
大衆文化からの関心の広がり	◎	◎	◎	◎
大衆文化以外の日本への関心	○	○	−	−
日本語が好き	○	◎	◎	◎
日本語の勉強はおもしろい	○	○	◎	◎
日本語はむずかしい	○	◎	○	◎
日本語が得意	△	△	○	○
大学以前の日本語学習	○	×	×	○
大学以前の自らの日本語評価	○	○	×	○
大学以後の自らの日本語評価	△	△	○	○
大衆文化理解のための日本語	○	◎	△	◎
日本語学習キーワード	学術的専門的日本語	日本の会社でやっていける	母語話者並みの発音	−
日本に関した仕事がしたい	◎	◎	◎	◎
日本語を使う仕事がしたい	◎	◎	◎	○
将来の展望	ゲームの仕事 →日本の会社	日本に住む	香港の 公務員 または銀行	ゲームの 日本語に 関する研究

◎よく当てはまる　○まあ当てはまる　△あまり当てはまらない
×まったく当てはまらない　−言及なし

6　教育心理学分野における近年の内発的動機づけ研究の動向

自己決定理論については、「外発的動機づけ」が「外的」「取り入れ」「同一化」「統合」と細分化されているのに対し「内発的動機づけ」が単一のものとして扱われ細分化されていない、動機づけ構造は直線的な一次元モデルとは言い切れないのではないか、自律性と学習自体の目的性（「学習内容が好き」「学ぶことが楽しい」など）を同一視してよいのかという議論がある。また、従来述べられてきた「内発的動機づけの方が望ましい」という考え方についても再検討が行われている。

そのため、近年、教育心理学の分野において、内発的動機づけをめぐり新

しい知見が生まれている。

6.1 「興味」に関する研究

「興味」は、近年、教育心理学の分野で研究されるようになってきた概念である。前述のように、「内発的動機づけ」は「外発的動機づけ」ほど細分化して分析されていないという議論があったが、「興味」の研究では、「内発的動機づけ」がより詳細に分析されている。

田中（2015）は、日本の児童・生徒を対象に、「理科に対する興味」を調査し、分類された6種類の「興味」が「価値的興味（多くの知識を必要とする「深い興味」）」「感情的興味（あまり多くの知識を必要としない「浅い興味」）」にまとめられることを示した。そして、「深い興味」である「思考活性型興味（「自分で考えられることがあるから」など）」「日常関連型興味（「自分が普段経験していることと関連があるから」など）」と意味理解方略や学習行動との関連が強いことが示唆された。

また、湯・外山（2016）は、日本の大学生を対象に、専攻している分野への「興味」を調査した。その結果、専攻分野に対する「興味」として「感情的価値による興味（「学習機会を楽しみにしている」など）「認知的価値による興味（「この分野の知識は重要だと思う」など）」「興味対象関連の知識（「この分野について様々な知識を持っている」など）の3因子が抽出された。そして、いずれの因子も、内発的動機づけとほぼ同義である「内的調整」「統合・同一化調整」・自己効力感・周囲からの評価ではなく習熟を目指す「マスタリー目標」との相関が有意に高いことが明らかになった。「マスタリー目標」を持って課題に取り組む者は、失敗を自分の情報源と見なし困難な課題にも積極的に取り組む傾向があるという（藤井2012）。

6.2 内発的動機づけの二次元モデル

櫻井（2009）は、「学習の目的性」と「自律性」を分離し、「手段-目的」「自律-他律」の二次元で「内発的動機づけ」「外発的動機づけ」を再検討した。そして、「手段性が高く自律性が高い動機づけ」を「社会化された外発的動機」としてポジティブな動機づけと評価した。

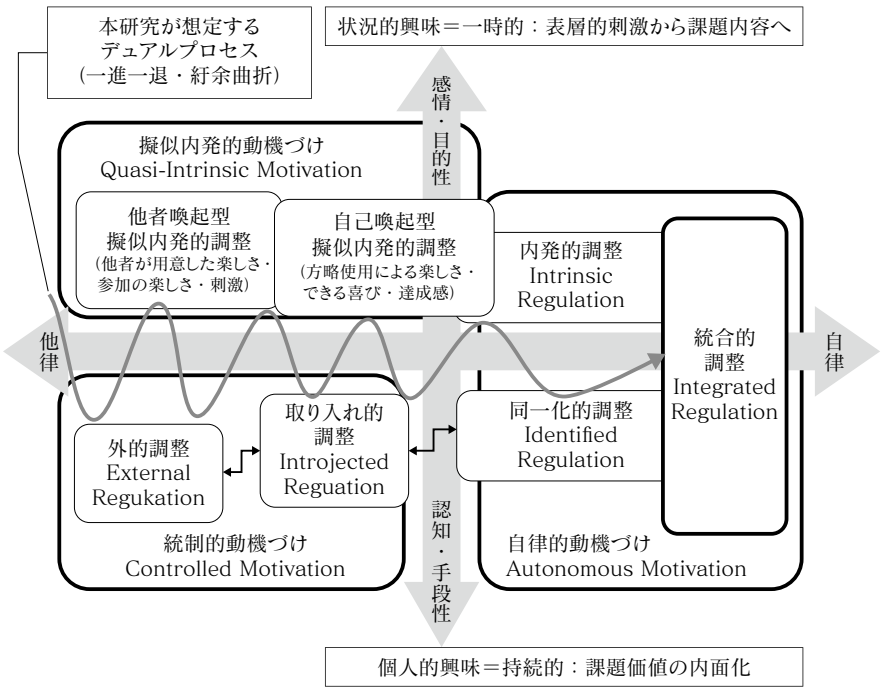
伊田（2015）は、速水（1998）により「学習そのものを目的としているが他律性が高い」動機づけを「表層的なおもしろさを与えることからくる内発的動機づけ」である「擬似内発的動機づけ」として、再検討を行っている。「擬似内発的動機づけ」は、「学習内容それ自体に由来するおもしろさ」ではなく、「学習内容とは比較的関連の薄い刺激によるおもしろさ」であり、学習を深め継続させるポジティブな動機づけとは言い切れない。伊田は、この「擬似内発的動機づけ」を、さらに「他者喚起型内的調整」と「自己喚起型内的調整」に分類した。「他者喚起型内的調整」は表面的な「他者が用意した楽しさ」であり、「自己喚起型内的調整」は「自ら使うことの楽しさ」「達成感」など、より自律的な動機づけである。

「自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル（図2）」は、内発的動機づけの二次元モデル、「擬似内発的動機づけ」、および6.1で述べた「興味」

と「価値」に着目し、伊田（2015）により提案されたものである。

「自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル」は、「外的（しかたなく）」であった学習動機が、「他者が用意した楽しさ（他者喚起型擬似内発調整）」や「できる喜び・達成感（自己喚起型擬似内発調整）」により一進一退しながら自律的になっていくことを示している。そして、学習の目的性が高い（興味があって学習する）場合には「状況的興味」が課題内容への興味へ、すなわち一時的に「おもしろい」と感じた興味が学習内容そのものへの興味に変わる、一方、学習の手段性が高い（何かの必要があって学習する）場合には「個人的興味」において課題価値が内面化されていく、すなわち「役に立つ」など継続性の高い興味がより自分に引きつけられていく。また、このモデルでは、自己決定理論では「内発的調整」の前の段階におかれていた「統合的調整」を、「手段性の高い動機」と「目的性の高い動機」が統合した形として最も自律性が高いとしている。このことは「自律性の高い動機づけ」は「学習の目的性・手段性を問わない」ことを意味する。

■図2　自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル（伊田2015）



7 考察

7.1 内発的動機づけ理論と香港における日本語学習者の動機づけ

5章で取り上げた香港の日本語学習者の内発的動機づけの解釈には、「自己決定理論」よりも「自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル」が適合的であると考えられる。

まず、「自己決定理論」は、無動機または内発的動機づけが低い状態から内発的動機づけが高い状態に移行することを想定しているため、当初から内発的動機づけが高いと考えられる対象者への適用が難しい。

次に、「自己決定理論」とは矛盾する結果が、「自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル」では説明可能である。「自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル」は、最も自律化した段階では学習の目的性・手段性を問わないことが特徴である。インタビューの対象者Bは、日本語が日本に住み仕事をするための手段になっているが、「日本語は難しい」と感じているにもかかわらず、「日本語が好き」「日本語学習は面白い」と感じており、「やりたいからする」という自律化が進んだ「統合的調整」段階にあると解釈することができる。

調査対象となった香港の学習者は、日本のポピュラーカルチャーが「他者喚起的疑似内発的動機づけ（他者から与えられる楽しさ）」として学習のきっかけになり、その後、日本語を使うことによる「自己喚起的疑似内発的動機づけ（日本語を使う楽しさ）」が「内発的動機づけ（日本語を学ぶ楽しさ）」につながり、最終的に「統合的動機づけ（やりたいから日本語を学ぶ）」段階に達したと考えられる。

7.2 内発的動機づけ理論と日本語教育研究

香港に限らず、日本のポピュラーカルチャーをきっかけとして日本語学習を始めた学習者は、日本語そのものに関心があり当初から内発的動機づけが高いことが予想される。そのため、無動機あるいは外発的が高い学習者を内発化させることを想定した自己決定理論には適合しにくいことが予想される。

「自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル」は、学習の目的性と自律性を分離し、学習の目的性が高い場合には擬似内発的調整を経て自律化していくと想定していること、最も自律化した段階では、学習の目的性・手段性は問わないことが特徴である。そのため、JFL環境における日本語学習者の学習動機づけの分析や学習動機づけの観点からの学習支援に有効であると考えられる。なぜなら、「自己決定論」以前の内発的・外発的動機づけ研究では内発的動機づけは細分化されていないが、「自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル」では、内発的動機づけ・外発的動機づけの枠組みにと

らわれず、学習の手段性・目的性を共に視野に入れながら学習者の自律化の分析・検討、および自律性育成のための方策の提案が可能となるためである。実際に日本語を使う機会が少ないJFL環境では、学習者の自律性の育成は果たすべき大きな課題である。その面においても、「内発性」より「自律性」を主眼にした動機づけモデルは有用であると言えよう。

「日本語に興味がある」「日本語が好き」という学習者は、教師にとっては「よい学習者」であると捉えられる可能性が高い。しかし、「日本語に興味がある」「日本語が好き」という学習者が高い学習動機づけを維持しつづけ、自律化して十分に日本語を学ぶことができるとは限らない。ポピュラーカルチャーがきっかけで日本語に興味を惹かれて学び始めたものの、何らかの困難のために学習が続かない、関心が一時的・表面的な状態にとどまり学習が深まらない、あるいは、他の事項に比べ日本語学習の優先度が下がったなどの理由で日本語学習を辞めてしまう学習者は少なくないことが予測される。たとえば、瀬尾・陳・司徒（2012）は、香港の社会人日本語学習者に対して調査を行い、日本語学習を辞めた理由として「仕事が忙しくなった」「家庭の事情」「仕事が変わった」など環境的な要因が最も多いと報告している。また、次に多い理由として「ペースが速すぎる」などカリキュラム上の問題が挙げられている。

「日本語に対する興味」を6.1で述べた「深い学びにつながる興味」の観点から精査することには意義があろう。また、日本語学習における学習者の自律性を高めるためには「自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル」からの検討や学習設計が一助となると考えられる。日本語学習そのものが動機づけとなっている学習者が自律化していくためには、感じている面白さが一時的・表面的な段階にとどまっている場合には、「方略使用による楽しさ」「できる喜び」「達成感」など「自己喚起型擬似内的調整」を意識したカリキュラム開発が望ましい結果をもたらすと予測できるためである。

日本のポピュラーカルチャーによる日本語教育実践としては、アニメ・マンガで用いられる日本語を学ぶ授業が複数報告されている（杉山・田中2008、熊野・川嶋2011など）。これらの実践において、アニメ・マンガは学習者の興味を引きつける手段として用いられている。アニメ・マンガで用いられる日本語を学ぶという実践は、他者から与えられたものを受身的に楽しむ「他者喚起型内発的動機づけ」と考えられ、あまり自律化していない学習者には効果的だが、自ら日本語を使いたい自律化が進んだ学習者には、むしろ逆効果となる可能性がある。「勉強しなくてもポピュラーカルチャーで使われている日本語が分かる」ことが動機減退要因となることがある（許2018）ためである。

また、表面的な面白さによって学習者の注意を惹きつけることを意図した実践には、「日本語学習自体は楽しいものではない」という教師の暗黙の前提が含まれる危険性がある。本来、学習は人間にとって不可欠な好ましいものである。波多野・稲垣（1973）が主張するように、人間は生まれながらにして知的好奇心を持ち、内発的動機づけはその知的好奇心により支えられている。

冒頭で述べたように、JFL環境における日本語学習者は300万人を超える。国際交流基金（2017）によると、機関による日本語教育は、7地域、130か国で行われ、機関数は16179にのぼる。その学習環境はさまざまであろうが、「日本語が必要だから」「日本語話者と接触があるから」という理由よりも、ポピュラーカルチャーなどがきっかけで日本語そのものに興味を持ち学習を始めた者が多いと考えられる。他方、インターネットやICTの発展により、実際に日本語を使い、その喜びを味わう機会は増大している。

外国語学習は学習者の世界を広げ、より広い意味で社会に貢献する。学習を意義ある面白いものとして捉えることは教育に携わる者の責務である。日本語学習の持続可能性を新たな内発的動機づけモデルの観点から探っていくことは、その責務に大きく貢献できるであろう。

8 今後の課題

本稿では、教育心理学における内発的動機づけ研究の日本語教育研究における可能性を理論的な観点を中心に検討した。この可能性を現実化していくためには、ポピュラーカルチャーによって内発的動機づけの育成を図るための教育実践と実証的研究およびさらなる理論的な検討が不可欠である。

実践については小林（2018b）が進行中であるが、小林（2017）で行った質問紙調査の量的な検討は完了していない。今後は、実践と実証的検証を弁証法的に継続しつつ、理論の精緻化を図っていきたい。

謝辞

調査にあたり尽力くださいました香港大学の萬美保先生、および調査に協力してくださった学生のみなさんに心から感謝いたします。また、本稿はJSPS科学研究費補助金基盤研究（B）「東アジア圏の複言語主義共同体の構築―多言語社会香港からの示唆―」（課題番号15H3221）によるものです。研究のきっかけを与えてくださった研究代表者の河合靖先生に感謝申し上げます。

参考文献

藤井勉（2012）「達成目標理論」上淵寿（編著）『キーワード動機づけ心理学』有斐閣, pp.74-76

Gardner, R.C. & Lambert, W.E. (1959) Motivation Variables in Second Language Acquisition, *Canadian Journal of Psychology*. 13(4), pp.266-272

郭俊海・大北葉子（2001）「シンガポール華人大学生の日本語学習動機づけについて」『日本語教育』110，pp.130-139

波多野誼余夫・稲垣佳世子（1973）『知的好奇心』中公新書

速水敏彦（1998）『自己形成の心理―自律的動機づけ―』金子書房

廣森友人・田中博晃（2006）「英語学習における動機づけを高める授業実践：自己決定理

論の視点から」『外国語教育メディア学会機関誌』43，pp.111-126
堀野緑・市川伸一（1997）「高校生の英語学習における学習動機と学習方略」『教育心理学研究』45，pp.140-147
市川伸一（2011）『学習と教育の心理学　増補版』岩波書店
伊田勝憲（2015）「疑似内発動機づけの概念化可能性を探る：自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル」『静岡大学教育学部研究報告　人文・社会・自然科学篇』65，pp.139-150
小林由子（2016）「日本語学習における「内発的動機づけ」の再検討」『北海道大学国際教育研究センター紀要』20，pp.81-92
小林由子（2017）「香港における日本のポピュラーカルチャーは日本語学習とどう関わるか」国際シンポジウム「多層言語環境の外国語教育」北海道大学学術交流会館，2017年3月9日
小林由子（2018a）「香港における日本語学習と日本のポピュラーカルチャーの関連―内発的動機づけの観点から―」『東アジア圏の複言語主義共同体の構築―多言語社会香港からの示唆―』平成27年～平成29年度科学研究費補助金基盤研究（B）（一般）研究成果報告書，pp.79-97
小林由子（2018b）「多文化交流科目『文化としての日本マンガ』で留学生は何を学ぶのか」『日本語教育方法研究会誌』24（2），pp.46-47
国際交流基金（2013）『海外の日本語教育の現状　概要』くろしお出版
国際交流基金（2017）『海外の日本語教育の現状　2015年日本語教育機関調査より』https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey_2015/all.pdf（最終アクセス2018年4月13日）
熊野七絵・川嶋恵子（2011）「「アニメ・マンガの日本語」webサイト開発：趣味から日本語学習へ」『国際交流基金日本語教育紀要』7，pp.103-117
李培徳（編著）（2006）『日本文化在香港』香港大学出版社
宮副ウォン裕子（2007）「多文化スピーチコミュニティー香港における日本語の学習・教育　―Connections, Cultures, Communicationからの一考察―」『日本語教育』133，pp.38-45.
根本愛子（2016）『日本語学習動機とポップカルチャー～カタールの日本語学習者を事例として～』ハーベスト社
縫部義憲・狩野不二夫・伊藤克浩（1995）「大学生の日本語学習動機に関する国際調査―ニュージーランドの場合―」，『日本語教育』86，pp.162-172
Ryan, R., & Dici, E. (2009). Promoting self-determined school engagement: Motivation, Learning, and well-being. In K.R. Wentzel, & A. Wigfield (Eds.) *Handbook of Motivation at school* (pp.171-195). New York: Routledge
櫻井茂男（2009）『自ら学ぶ意欲の心理学　キャリア発達の視点を加えて』有斐閣
櫻井茂男（2012）「夢や目標をもって生きよう！自己決定理論」鹿毛雅治（編）『モティベーションを学ぶ12の理論』金剛出版，pp.45-71
瀬尾匡輝・陳徳奇・司徒棟威（2012）「なぜ日本語学習をやめてしまったのか　―香港社会人教育機関の学習者における動機減退要因の一事例」『日本学刊』（15），pp.81-95
杉山ますよ・田中敦子（2008）「アニメ・マンガを用いた多様な授業の試み」『日本語教育方法研究会会誌』15（1），pp.30-31
瀧沢絵里（2012）「自己決定理論」，上淵寿（編著）『キーワード動機づけ心理学』有斐閣，pp.72-74
田中瑛津子（2015）「理科に対する興味の分類―意味理解方略と学習行動との関連に着目して―」，『教育心理学研究』63，pp.23-35
湯立・外山美樹（2016）「大学生における専攻している分野の興味の変化様態―大学生用学習分野への興味尺度を作成して―」，『教育心理学研究』64，pp.212-227
臼井直也（2014）「アニメーション，マンガと日本語学習の関わりのダイナミズム分析―アニメーション，マンガを専門とする元学習者のインタビュー調査から―」『2014年度日本語教育学会秋季大会予稿集』，pp.189-194

呉偉明（2015）『日本流行文化與香港　歴史・在地消費・文化想像・互動』商務印書館
許晴（2018）「中国の日本語専攻学習者の専攻の振り分けによる動機減退要因の比較」『日本語教育』169，pp.46-61

（平成30年4月16日受理、平成30年6月1日採択）